

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<研究ノート> 「伝西行筆未詳歌集切」私注（上）

著者	中村 文
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	11
ページ	292(77)-285(84)
発行年	2011-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000523/



「伝西行筆未詳歌集切」私注（上）

中 村 文

「伝西行筆未詳歌集切」は現在までに六葉の存在が明らかにされている。⁴¹そこに収載される五〇首のほとんどは現存するどの和歌資料にも見出せず、貴重な和歌資料あることは言うをまたないが、近時、科学的な方法によりこの古筆切の成立年代が平安末期、後白河親政期以前であることが実証され、⁴²資料的な価値はいっそう高まったと言えよう。

この古筆切に収められる和歌が、当該期において和歌表現の更新をめぐるどのような工夫が試みられ、後代にどう継承されていったのかを考える上で、きわめて重要な作品群であることにについては、すでに数首の歌を取り上げてその構想や表現の分析を行い、考察を加えたが、さらに対象を歌群全体に広げて表現上の特質を検討するために、一首ごとの注釈を試みることにした。

本稿では六葉の内、春の歌を収める三葉分の六首に評釈を加える。取り上げた切とその略称は次の通りである。

- 『夏かげ帖 下』所載岡谷家蔵（略称「岡谷」）
- 『夏かげ帖 下』所載関戸家蔵（略称「関戸」）
- 『書道全集』第十八卷所載田中家蔵（略称「田中」）

凡例

- ・翻刻はすでに刊行されている写真版によった。
- ・和歌の掲出は切ごとにまとめ、各切はできる限り季節の推移順に従って配列するよう心がけた。
- ・各歌には通し番号を振り、一首の末尾には収載する切を略称によって示し、切内部の歌順をその下に記した。
- ・注釈には、和歌本文の翻字のほか、〈釈文〉〈通釈〉〈語釈〉〈補説〉の各項を立てた。〈釈文〉には、解釈に資するため、本文に適宜漢字を当て、濁点を付したものを掲げた。〈通釈〉には現代語訳を、〈語釈〉には語句の意味や表現史的に特記すべきことがらを記した。〈補説〉には一首全体の作意や構想上の特質などを記した。
- ・「伝西行筆未詳歌集切」所載和歌以外の和歌本文および歌番号は、『新編国歌大観』により、適宜私に漢字を当てて示した。万葉集の歌番号は旧番号を用いた。

注釈

1 いつしかとはつねなくなりうくひすのとしをこめてやたにを
いてけむ（岡谷1）

《釈文》 いつしかと初音鳴くなり鶯の年をこめてや谷を出でけむ
《通釈》 早くも今年になって初めて鳴く声が聞こえる。鶯はまだ
去年のうちに、谷を出たのだらうか。

《語釈》 ○いつしか「大原之^{オホハラノ} 此市柴乃^{コノイチシバノ} 何時鹿跡^{イツシカト} 吾念妹尔^{ワガオモセワイセニ}
今夜相有香裳^{コヨヒアヘルカモ}」（万葉集・巻四513志貴皇子）のように早くから用

いられたが、平安中期までは、事態の実現がいつか不明であるの
をもどかしく思い、また早く実現することを願う気分を表わした
例が多い。勅撰集では後拾遺集以後に、「いつの間にか早くも」の
意で用いられる例が見え（春上3藤頭仲「いつしかと明けゆく空
の霞めるは天の戸よりや春は立つらん」堀河百首、鶯と組み合
わせた作に「いつしかと谷の鶯なくなるは山よりこゆる春のしる
しか」（堀河百首57鶯・師時）がある。○初音鳴くなり「初音」
はその年最初に聞く鶯・郭公などの声。「なり」は推定。用例は
多くなく、勅撰集では新後撰集まで見えないが、早く「春風に梅
の梢の香をとめて今ぞ鶯初音鳴くなる」（従二位親子歌合3）の
例があり、「うちなびき春たちきぬと鶯のまだ里なれぬ初音鳴くな
り」（久安百首301頭輔）、「仙人よ斧のおとしばしとどめなん谷の鶯
初音鳴くなり」（永暦元年清輔家歌合4・頭昭）のように、平安
末期以降に用例が見える。○年をこめて 年が改まらないうちに。
「日和あらば年をこめてと漕ぎゆけどつひに今宵になりけるか
な」（為忠家初度百首560舟中歳暮・盛忠）を初例とする新しい措辞。

（七八）

用例は少ないが、定家の千五百番歌合歌に、「宿ごとに春の霞を待
つとてや年をこめてはいそぎ立つらん」（拾遺愚草1070）がある。
○谷を出でけむ 鶯は冬の間は谷におり、春になると里に出るも
のとされた。「けむ」は過去推量。この措辞は他には南北朝期の「い
と早も鳴く鶯は白雪のふる年よりや谷を出でけむ」（題林愚抄232
兼綱卿、永徳百首）にのみ見える。「谷を出づ」の表現も珍しく、「谷
を出でて高きに移る鶯は花咲く宿のあかずなりけり」（長秋詠藻
617文治六年女御入内屏風）、「やへ深き霞の底の鶯は声ばかりこそ
谷を出でけれ」（御室五十首4守覚）が早い作例である。

《補説》 新年になってすぐに鶯の初音を耳にし、鶯は去年のう
ちに谷の古巢を出たのかとその理由を推測した体の歌。「春かけて
深山や出でし郭公けさいつしかと初音鳴くなり」（為忠家後度百
首165首夏郭公・為業）は、発想・措辞が類似する。

2 かきりありてくる、はいはいいつかたへゆくともはるをおも
はましかは（岡谷2）

《釈文》 限りありて暮る、はいはいづ方へ行くとも春を思はま
しかば

《通釈》 限界があつて（春が）暮れるということについては何も
言うまい。もし、どちらの方に行くのだとも春について思うのな
らば（どんなに心休まることだらうか）。

《語釈》 ○限りありて ある事態の続く期間が自然の摂理により
制限されていることを示す。「限りありて雨に障らぬ春なれば散
る花笠をきてや行くらむ」（定頼集5）が例としては早く、八代

集では金葉・千載両集にしか見えない比較的新しい措辞で、平安最末期に用例が増大する。定頼歌のごとく季節それ自体との別離や、限ありて春も半ばになりぬれば越路に帰る雁ぞ鳴くなる（堀河百首205帰雁・隆源）のように、帰雁・落花など景物との別れ、また人との死別を詠む作に用いられる。○暮るゝはいはじ「暮るゝ」は春が終わること。「ゝはいはじ」はことさらに取り立てて言うまいの意。「じ」は打消意志。「言はじ」は「大伴乃 見津跡者不云 赤根指 照有月夜尔 直相在登聞」（万葉集・卷四565賀茂女王）のように、「ゝとは言はじ」の形となる場合がほとんどで、引用を示す助動詞を伴わない例は、「月のゆくあたりは言はじおほかたの空にも雲のなき世なりけり」（散木奇歌集535）、「つらかりし折をば言はじ逢ひみても」（「つうれしさに音ぞ泣かれける」（言葉集85覚性）など平安後期以降に多く見える。○いづ方へ行く 春がどちらの方向に去っていくのかに関心を寄せる身振りを通して、惜春の情を表現しようとした作に、早く「風ふけば方も定めず散る花をいづ方へゆく春とかは見む」（拾遺集・春76貫之）がある。○思はましかば「ましかば」は現実と反対の事態を仮定する言い方（反実仮想）。もし〜と思うならば。「いたづらに過ぐる月日をたなばたの逢ふ夜の数と思はましかば」（拾遺集・秋151恵慶）、「春のくるこの暁の鳥の音を初鶯と思はましかば」（清輔集8）のように、実現していない望ましい事態を想定し、それによってもたらされるはずの喜ばしい感情を言外に感じ取らせる叙法に用いられることが多い。ここでもその用法を踏襲していよう。〈補説〉行く春を惜しむ、暮春ないしは三月尽の歌と考えられる。二句切。初二句は春が去ることは定められた自然の摂理であると

して諦念を示し、三句以下では春がどちらの方向に行ったのかだけでもせめて知ることができればと、最低限の希望を述べる。愛惜の対象の行方を把握したいとする心情は、「いづかたへゆくとはかりはつげてましとふべき人のある身とおもはば」（後拾遺集・雑224和泉式部）などにも認められる。当歌は「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の陰かは」（古今集・春下134躬恒）のように景物への執着等を通して表現されることが多かった、去りゆく季節との別離の感情を、諦念と愛惜との二つの感情を綯い合わせることで、やや抽象的に表現しようとした点に、新しさへの試みが認められる。

3 いかはかりあはれなるらむかへるかりくもちにいつるはるの
あけほの（関戸1）

〈釈文〉 いかはかりあはれなるらむ帰る雁雲路に出づる春の曙
〈通釈〉 いったいどれほどあわれな気持ちでいることだろうか、帰る雁は。北に向かう帰り道へと踏み出す、春の曙であるよ。

〈語釈〉 ○いかばかりあはれなるらむ「らむ」は現在推量。初二句を同じくする作に、「中有の心を」と詞書のある西行の歌、「いばかりあはれなるらん夕まぐれただ一人ゆく旅の中空」（聞書集231）がある。帰雁を主題とする3番歌と、中陰の期間にある死者を詠んだ西行歌とは、設定された状況は大きく異なるものの、遙か遠くまで旅路をたどろうとする存在の、心細く寂しい心境を推し測るという構想において共通する。○帰る雁 春に北へと帰って行く雁。「帰雁」題は堀河百首では春二十題の十三番目に、「桜

題よりも後に置かれるが、勅撰集では桜の歌群の前に置かれることが多い。○雲路に出づる 他に作例の見えない措辞。「雲路」は鳥が通う空の道で、「帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞吹きとけ木の芽はる風」（後撰集・春中60読人不知）のように、秋に飛来し春に帰る雁の行き来の道として、早くより詠まれた。「出づる」は北へと帰途を踏み出した雁の動作を示すのであろう。○春の曙措辞としての初例は「恋しさも秋の夕べにおとらぬは霞たな引く春の曙」（和泉式部統集188）だが、勅撰集の初出は千載集で、平安末期以降に用例が爆発的に増える。「春の曙」の情趣美は『枕草子』初段に言及されるが、和歌においても「情けあらん人に見せばや梅の花をりをり薫る春の曙」（清輔集21）、「またや見む交野のみの桜がり花の雪ちる春の曙」（新古今集・春下114俊成）等の作に見られるごとく、ほの暗さの中から花鳥の生動が浮かび上がってくる、美しい季節を象徴する時間として捉えられていたと考えられる。

〈補説〉「帰る雁」の感じている「あはれ」は、その北に向かって旅立つ時刻が「春の曙」に設定されていることを考え合わせるならば、遙かな旅の心細さや寂しさだけではなく、花々の咲く美しい時節と別れていく悲嘆をも含んでいるだろう。そうした意味において当該歌は、古今集の「春霞たつを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる」（春上30伊勢）の発想伝統に連なると言えよう。しかし、帰雁歌の一つのパターンとして、「今はとて越路に帰る雁がねは羽もたゆくや行き帰るらん」（金葉集・春28経通）「天つ空ひとつに見ゆる越の海の浪を分けても帰る雁がね」（千載集・春上38頼政）のごとく、遠い故地へと帰る雁の辛苦を思いやると

いう構想はあったものの、3番歌のように春に別れて北に向かう雁の心境そのものを推測する歌は珍しい。また、雁の声を聞いて「あはれ」と感じる人間の心を詠んだ歌は、「初雁の旅の空なる声きけば我が身をおきてあはれとぞ聞く」（中務集50）のように見えるが、景物の心情について、「あはれなるらむ」とあらわに心情を指し示す語を用いて忖度した点も珍しいと言えよう。

4 としことにあたるはなをおしみつ、いくたびひかせをうらみ
 きぬらむ（関戸2）

〈釈文〉年ごとにあだなる花を惜しみつ、いくたび風を恨みきぬらむ

〈通釈〉毎年毎年、（こちらの気持など知らぬげに）薄情にも散ってしまう花を別れがたく思い思ひして、何度（花を散らす）風を恨んできたことだろうか。

〈語釈〉○あだなる花「あだ」は実のない意で、桜と取り合わされる、「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の沫とこそなれ」（古今集・春下81高世）のごとく、もろく散るはかなさの形容となるが、「あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり」（古今集・春上62読人不知）のように桜を擬人化し、花を惜しむ人間の気持に対する不誠実さや薄情さを含意させて詠む例がむしろ多い。「あだなる花」の措辞の用例は多くはないが、「恋しくはいかにせよとかかくばかりあだなる花のもとに寝ぬらん」（古今六帖4048伊勢）のように早くから見え、当該歌と同時代の例も「哀にも春を忘れず匂ふかなあだなる花の心と思ふに」（続

詞花集・春下56賢智、今撰集18にも入る、「何とかくあだなる花の色をしも心に深く思ひそめけん」（西行法師家集91）のように見える。○惜しみつ、「惜しむ」は名残惜しく思うこと。愛惜すること。「つ、」は動作の反復を示す。○恨みきぬらむ「恨む」は不満やくやしなどの感情を持つ意。「らむ」は原因推量。落花は桜の薄情さを因とすると捉え、そのような真相であるにもかかわらず、花を散らす風の方に非があるとして恨んできた自らの心をいぶかしむ表現。

〔補説〕人間の愛惜にもかかわらずはかなく散る桜を「あだ」とした基本構想は、やがてさまざまなバリエーションを産んでいく。その一つのパターンとして、「あだ」と対比的な素材や語を取り合わせる方法がある。「あだな色―深く染める」の対比を用いる前掲西行歌や、「あだに移ろふ色―変わらぬ心」の対比による「あだにのみうつろふ花の色なれど染めし心は変らざりけり」（隆信集75）等である。これらの歌と比較すると、「あだなる花を惜しみ―無実の風を恨む」と、二つの対象景物に対する作中主体の心情を対比してみせた4番歌の構想は、「花―あだ」の表現史に基づきつつ、その枠組のドラスティックな転換を目指した試みであったことが見て取れる。桜を散らすゆえに風を恨むというモチーフも、すでに「匂ふより心あだなる花故にのどけき春の風も恨めし」（古今六帖390）に見ることができるが、4番歌では作中主体にそうした捉え方に疑義を差し挟ませて、さらに複雑な心情を描き出そうとしている。

5 なこりなくやとのさくらのちるときはうゑけむさへそくやしかりける（田中1）

〔釈文〕名残なく宿の桜の散るときは植ゑけむさへそくやしかりける

〔通釈〕心残りがまったくないように（我が）家の桜が散るときには、（自分でその）桜を植えたということまでも悔やまれることだよ。

〔語釈〕○名残なく 伊勢集から見える措辞だが、用例はそれほど多くなく、勅撰集では金葉・新古今集に各一首ずつ見えるのみである。「名残なく夜半の風に雲はれて心のままに澄める月かな」（金葉集・秋199行宗）のように、「以前の様子をまったく残さず」の意で、状態の一変したことを述べる場合が多いが、「名残なく過ぎぬなるかな郭公こそ語らひし宿と知らずや」（千載集・夏162実国）のように、「未練がまったくないように」の意で、景物にそれを待望する人間への思い遣りがないことを述べる例も少数ながら存在する。前掲歌のように時雨・雲などの天象や郭公と組み合わせる作が多いが、落花と取り合わせた例に、「山桜えだきる風の名残なく花をさながら我が物にする」（山家集140）、「名残なく花散り果てて行く春を何のゆかりに惜しむなるらん」（月詣集723顕家）がある。○くやしかりける 自分の行動が適切でなかったことに気づいて残念に思う意。「ける」は気づいて詠嘆する意。

〔補説〕「名残なく」は単に桜がすっかり散ってしまう様を述べるのではなく、作中主体が桜の散る様態から、桜のこの世に対する執着や未練をまったく感じ取れず、桜が作中主体に「つれない態

度」を取っていると受け止めた無念さも示していよう。一首のテーマは落花に対する愛惜だが、桜と作中主体を男女に見立て、桜のすげなさとして惹起された作中主体の後悔というあらわな感情を通して描こうとしたがゆえに、俳諧歌のような滑稽さがかすかに加わっている。

6 さお山のかすみのふもとのゆきのきえゆけはかすみのころも
すそやぬるらん（田中2）

〔釈文〕 佐保山の麓の雪の消えゆけば霞の衣裾や濡るらん

《通釈》 佐保山の麓に積もっていた雪が（春になり）消えていくので、今ごろは（佐保山がまとっている）霞の衣の裾が（雪解けの水で）濡れているだろうか。

〔語釈〕○佐保山 大和国の歌枕。現在の奈良市法蓮町の北に連なる丘陵を言う。平城京の東北に位置し、五行説で春の方角（東）に当たることから、春ないしはその女神（佐保姫）と関連させて詠まれることもある。「霞」と取り合わせた作は、「佐保山サホヤマルミタナビクカスミミルト」イモヲオモヘデテ多奈引霞 毎見 妹乎思出 不泣日者無ナカスヒハナシ（万葉集・卷三473家持）のように早くから見えるが、この万葉歌の「霞」は火葬の煙を連想したものである。三代集以降も、「佐保山の杵の色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな」（古今集・秋下267是則）のように、むしろ秋の景物と組み合わせた作が多く、春と取り合わせる例としては、「霞の衣」項掲出の国基・俊頼歌などが早い。○麓の雪 用例は少なく、6番歌以前の作は、「吉野山麓の雪は消えにけり衣かたしき若菜摘むめり」（元真集115）が残るのみ。以後の作には

平安末期の作「位山ふもとの雪にうづもれて花の光をまつぞ久しき」(月詣集84定家)や、正治初度百首の二例(214式子・450良経)、および為家集(176)の例がある。○霞の衣「春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべらなれ」(古今集・春上23行平)のごとく早くから用いられた措辞だが、平安後期以降に用例が増大する。その傾向は、「佐保山」と春季の情景を取り合わせて詠むようになる時期と重なり合い、「春くれば麓も見えず佐保山に霞の衣もたちぞかけける」(国基集上)、「佐保山に霞の衣かけてけり何をか四方の空は着るらん」(散木奇歌集8)等の作も見られる。「霞の衣が濡れる」ことを詠む作は、すでに「惜しめども立ち去る春の春雨に霞の衣ぬれやしぬらむ」(為仲集88)に見られる。なお、「霞の衣」の措辞については、小林一彦「霞の衣」と「霞の袖」と―表現史上における藤原俊成と「艶」(『洗足論叢』23、一九九四年十二月)に詳しい考察がある。○濡るらん「らん」は現在推量。「今ごろはくだろう」と目に見えない情景を推測する。

〔補説〕季節の進行から言えば5番歌に先立つ早春の景を主題とする歌で、「積雪が消える」「霞が立つ」という二つの事態を関連させて、「雪解けの水が霞の裾を濡らす」という目新しい構想による表現を目指した作と考えられる。用いている措辞が後世の誹諧、「霞の衣裾は濡れけり／佐保姫の春立ちながら尿をして」(『新撰犬筑波』)と共通するゆえに、卑俗で滑稽な印象を与えもするが、『犬筑波』の句が和歌伝統を卑俗に転じたと言うべきで、6番歌には既成の措辞を組み合わせながら新たな構想を打ち出そうとする姿勢を認めてよいだろう。

注

- *1 池田和臣「伝西行筆未詳歌集切（二首切）考―時雨亭文庫蔵「五条殿
おくりおきし」との関係、および新出断簡について―」（『古代中世文学
論考』第十一集、新典社、二〇〇四年）、別府節子「伝西行筆の古筆の新
出葉を中心に」（『出光美術館研究紀要』13、二〇〇八年一月）参照。
- *2 池田和臣・小田寛貴「続 古筆切の年代測定―加速器質量分析法によ
る炭素14年代測定―」（『中央大学文学部紀要』105、二〇一〇年三月）参照。
- *3 中村文「伝西行筆未詳歌集切の和歌史的位置―平安末期の歌壇状況か
ら―」（『西行学』2、二〇一一年八月）。

Some Annotations on Pieces of an Unidentified Waka
Anthology Attributed to Saigyō (Part 1)

NAKAMURA, Aya

キーワード：和歌、注釈、構想

Key words : waka poetry, commentary, a conception of waka